

開業から100年

岩日タイムズ

新聞部
築 真優子

追憶を語り続ける 筑波鉄道「歴史講座」

7月7日「七夕まつり」が開催された桜川市真壁町内は多くの人で賑わっていました。真壁伝承館では「追憶の筑波鉄道」が展示されています。この展示は「歴史講座」が開催

までの予定でしたが、大好評につき、9月2日までの延長が決定しました。その企画の一環として、筑波鉄道のことを更に知ってもらおうと「歴史講座」が開催



参加者の質問に笑顔で答える川俣先生

講師の川俣正英先生は、県内の小学校の校長を経て退職後、現在は桜川市役所で勤務されています。おじが国鉄職員だったこともあり、幼少期から鉄道が大好きだった川俣先生は、時々ユーモアを交えながら講演を行っていました。参加者の年齢層は幅広く、年配の方々から、鉄道好きな小学生も数名参加し、自分が生まれる前に運行していた筑波鉄道について真剣に話を聞いていました。参加者の多くは、当時、筑波鉄道を利用していた人が多く、廃線になった昭和62年に茨城新聞社が制作した映像が流れると、あちこちで「懐かしい！」という声飛び交いました。

筑波鉄道の岩瀬・土浦間の路線が決定するまでは、多くの路線案が提案されては却下され、の繰り返しでした。中には宇岩線という、岩瀬から筑西、栃木の真岡を経由し、宇都宮

を終点とする案もあったそうです。しかし、茨城県西部、栃木県東部には川が複数存在し、鉄橋を作る費用や工事の難度、水害が起きた場合の対策も難しいというところで、結局この案も却下になりました。



昔懐かしい筑波鉄道の講演に夢中になる参加者
(桜川市・真壁伝承館内まかべホールにて)

当時から真壁は石材の一大産地として県西部でも栄えていたため、真壁に路線をつなげる案が多数を占めました。明治20年代には水戸線や常磐線の開通が続き、その路線をうまく東京につながる

かがキーポイントでした。大正7年（1918年）念願の筑波鉄道が開業し、貨物はもちろん、上野から土浦に来た行客は、筑波、さらに真壁・岩瀬まで訪れることになりました。

講演後の質疑応答では、多くの参加者が川俣先生に駆け寄りました。小学生もディーゼルカーとはどういうものか質問し、真剣な眼差しで話を聞いていました。老若男女が楽しめる鉄道の旅へいざなわれた時間でした。

顧問の時杉先生に勧められ、講演会に参加しました。今年の3月からりんりんロードに携わる機会が多く、また一つ地域の歴史を学ぶことができました。今回の講演では、筑波鉄道の路線が決まるまでに却下された複数の案の費用や距離など、月日が事細かに記載されていて、奥深く知ることができました。石材産業を最大限に生かすためにどの路線にするか、必要な費用はどのくらいかかるのか、といった当時の人々の気持ちを読み取ることができました。

廃線となってから今年で31年、今や岩瀬から潮来までを結ぶ長距離自転車道（りんりんロード）へと変化しましたが、道沿いには当時の駅舎や看板の名残も見られ、私たちは筑波鉄道の存在をいつまでも忘れることはありません。 (築)

編集後記